



- 第91回企画展 親鸞聖人生誕850年記念 P1～P3 近江堅田 本福寺
- 学芸員のノートから 大西艸人さんがみた堅田 P4～P5
- ミニ企画展から 俳諧摺物のお値段 P5
- 收藏品紹介 庄田家資料(当館蔵) P6

2023
No.
131



大津市歴史博物館

令和5年9月1日 発行

〒520-0037 大津市御陵町 2-2

TEL(077)521-2100

<https://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/>

親鸞聖人生誕850年記念企画展
(第91回企画展)

おうみかた たほんぶくじ
近江堅田 本福寺

会期：令和5年10月7日(土)～11月19日(日)



本福寺古記録 本福寺蔵 (大津市指定文化財 本福寺中世記録〔本福寺旧記〕を含む)

- ① 本福寺由来記 (室町時代)
- ② 草案 (江戸時代)
- ③ 教訓并俗姓 (戦国時代)
- ④ 蓮如尊師行状記 (江戸時代)
- ⑤ 本福寺明宗跡書 (1冊・1巻、室町時代)
- ⑥ 本福寺跡書 (室町時代)
- ⑦ 本福寺門徒記 (室町時代)
- ⑧ 父母孝養抄 (室町時代)
- ⑨ 江州堅田本福寺由緒記 (江戸時代)
- ⑩ 江州志賀郡堅田本福寺由来 (江戸時代)

「本福寺跡書」をご存じですか？

いきなり史料名を挙げてお尋ねしました。本書は、室町時代、堅田本福寺(浄土真宗本願寺派)の第6代住職の明誓が、同寺と堅田の来歴を書き上げた壮大な歴史書です。一般的に馴染みがないことは承知の上で、今秋の企画展「近江堅田 本福寺」は、この「本福寺跡書」(以下「跡書」)をはじめとする中世記録の展示を第一の目的としている、ということを、担当者としてまず告白しておきます。

かつて、この「跡書」をはじめ、「本福寺由来記」や「本福寺門徒記」など数点の中世記録は、明治・大正時代に歴史学界(中・近世史研究)で紹介されるやいなや、その内容の豊かさから大変重要な史料として知れ渡ることとなります。それは1950年代頃から始まる一連の堅田の歴史研究、あるいは一向一揆研究の進展と伴走するように、また堅田町史編纂(未完)の基礎史料としても活用されていったのです。ただし、実物を見ることができたのはごく一部の関係者のみでした。

そこで当時、龍谷大学教授として本福寺史研究を進めていた真宗史研究者の千葉乗隆氏が、『本福寺史』・『本福寺旧記』を公刊し、解説文と写真を掲載することで多くの方が利用できる環境を整えたのです。また、実物の一部は、一時的に本堂や寺外に展示されたこともあったようですが、寺中で厳重に保管され、ほとんど人目に触れることなく現在に至っています。

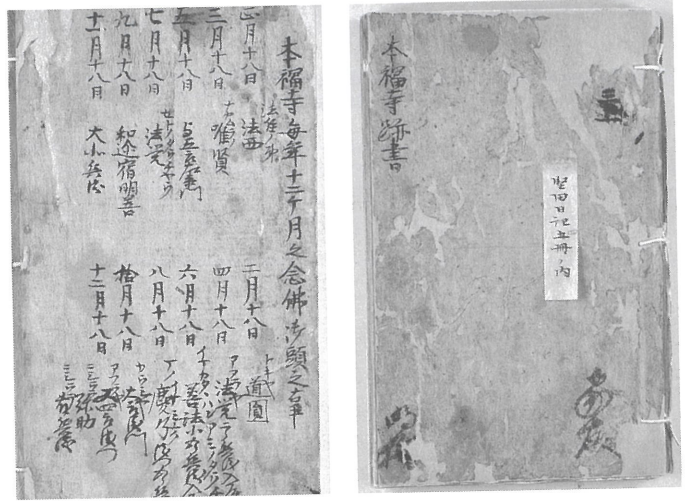
「本福寺跡書」について学んだ頃のこと

ここで非常に個人的な思い出になりますが、私が「跡書」に出合ったお話をさせてください。それはいまをさかのぼること約20年前のことです。当時、歴史学を専攻する大学3回生であった私は、ゼミの報告で「惣結合」(惣村、村落共同体)をテーマに取り上げ、具体的なフィールドを近江堅田に決めて発表準備をしている時、この「跡書」に出会いました。もちろん、実物を拝見したわけではなく、先に述べたように、刊行されていた『本福寺史』・『本福寺旧記』に掲載された解説文と写真を利用し、何とか室町・戦国時代の堅田の住民結合のありようについての発表を終えたのでした。その後は、先学の重厚な堅田歴史研究の壁にぶち当たり、卒業論文は別のテーマを選んでしまい、「跡書」も堅田に関する研究も、若き日の青春の1頁として、記憶の片隅にそっと置かれたのでした。

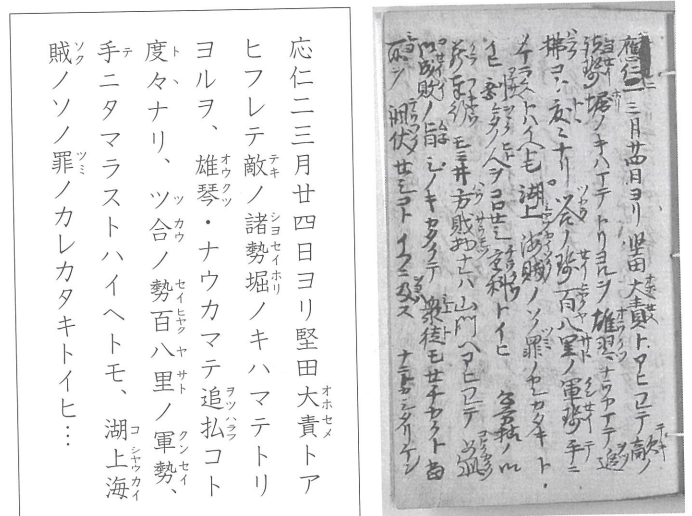
しかし、時は流れて2011年、幸運にも天津市歴史

博物館に奉職することになり、学生時代の堅田の歴史研究の熱い思いがフツフツと湧き上がり、甦ってきたのです。

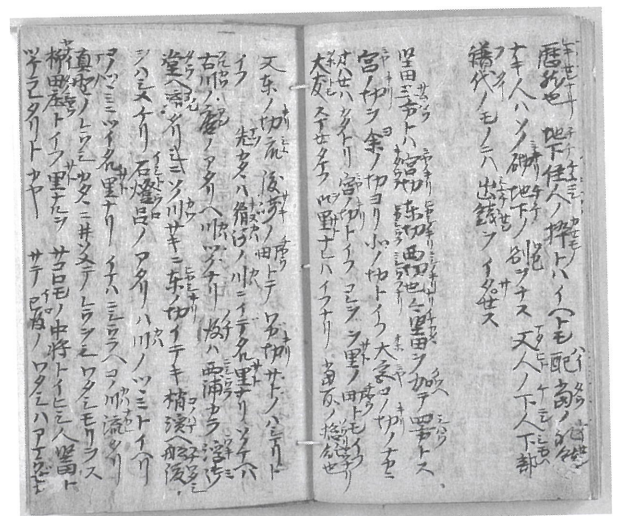
そして、さらに時は流れ、「跡書」の実物を初めて拝見することが叶った2019年の夏、嬉しさと緊張で直視できなかったことも、もう一つのエピソードとして告白しておきたいと思います(その後、じっくりと拝見しました)。



本福寺跡書 表紙(右)と冒頭(左)



堅田大責に関する部分。応仁2年(1468)、延暦寺が堅田を攻撃し、住民達が沖ノ島に逃げ延びるという事件



堅田四方に関する部分。堅田三方とは宮切・東切・西切で、今堅田を加えて四方という、とあります。

堅田の総合調査と本福寺法宝物・古文書等の調査

さて、「跡書」の拝見が叶った2019年の数年前、少しずつ堅田に関する古文書・歴史資料の整理と調査を進めることにしましたが、それにはいくつかの転機がありました。その一つが、大学研究者や文化財調査関係者とはじまった共同調査研究です。堅田大庄屋文書研究会と称し、伊豆神社に残る膨大な本堅田共有文書のうち、「本堅田村諸色留帳」とよばれる堅田藩大庄屋公用記録の解読を続け、それ以外の文書整理も遅々とした歩みではありますが進めてきました(現在も継続中)。

またこれと前後して、博物館では、同じく堅田の居家文書(2015年に博物館にご寄贈)の調査を進め、室町時代から江戸時代の堅田における舟運や堅田地侍層の活動の様子が見えてきました。ここまでくると、堅田に残る他の古文書群の整理の必要性も感じ、順次着手することになります。これが「跡書」を拝見することが叶い、本福寺文書の調査を開始する直前の2019年頃の事です。

そして2019年5月、本願寺史料研究所・浄土真宗本願寺派総合研究所による本福寺法宝物(浄土真宗寺院の絵像や聖教)の調査に同行させていただくことになりました。これまで博物館として、展覧会にいくつかのご宝物をご出陳いただいたことはありましたが、法宝物や文書・記録類の全容を知る総合調査を実施したことはありませんでした。この概要調査時、ご住職に誘われて蔵に入ったところ、驚きのあまり卒倒しかけました。かつて千葉乗隆氏やその先生にあたる森龍吉氏が整理した文書・記録類のほかに、総量で20箱を越える大量で未整理の近世・近代文書を確認したのです。これに未整理の絵画資料も含め、全点調査をさせていただくべく、博物館でお預かりするお許しを得たのです。



本福寺土蔵の概要調査(埃をかぶる古文書)

この時、いずれ展覧会で本福寺法宝物、文書・記録類、絵画資料を多くの方に知っていただきたいという思いがありました。早くもこの2023年に実ったということになります。この間、本福寺文書の調査指導を頂いた本願寺史料研究所の岡村喜史先生や大谷大学名誉教授の草野顕之先生には改めて御礼申し上げます。

再び本福寺中世記録と「湖族」

展覧会に向け、改めて堅田を歩いてみると、なんと歴史に満ちあふれた場所であることを再認識できます。琵琶湖の北湖と南湖を分かち、もっとも狭くなっている西側の場所に堅田はあります。湖岸側には平安時代に恵心僧都源信によって開かれた満月寺(浮御堂)があり、湖岸からは湖東側を一望することができます。堅田を拠点に琵琶湖の諸権利をつかみながら活動した堅田衆の存在が、時間と空間を越え、「跡書」をはじめとした本福寺中世記録から鮮やかによみがえります。

一方で、これら記録書は様々な背景、つまり自身の立場や主張が反映されていることにも留意する必要があります。「跡書」は、記主である明誓や、その父明宗(「本福寺由来記」の筆者)が、本願寺一家衆(親族)寺院からの圧迫を受け、それに抗うために書かれたものともいわれています。

また現在、堅田で通用される「湖族」という言葉も、その淵源をたどっていけば、「跡書」などにある「海賊」に行きつきます。「海賊」の言葉が具体的にどういった行動を指すのかこれまでも研究は進んでいますが、その一方で「海賊」、「湖賊」、「湖族」、そして「湖族の郷」と呼ばれ習わしていく現代の堅田の歴史もまた明らかにしていかなければなりません。

とりもなおさず、堅田の歴史を紐解き、また堅田のいま、そして未来を見通すため、やはり「跡書」や「本福寺由来記」など本福寺中世記録からはじめなければなりません。今回の展覧会では、これまで存在と内容は知られつつも、実物を見る機会がなかったこれら中世記録を一堂に集めることで、室町時代以来の堅田の歴史物語に触れていただく機会となれば幸いです。

(学芸員 高橋大樹)

大西艸人さんがみた堅田



【写真1】子供の遊び場だった堅田漁港（昭和44年4月）

展覧会の経緯

10月7日から11月19日まで「写真展 50年前の琵琶湖・堅田－大西艸人^{そうじん}がみた自然と営み－」を開催します。大西艸人さんからご自身が撮った堅田や仰木の写真を博物館に寄贈したいというお話をいただいたのは、令和3年（2021）11月のことでした。

大西さんは昭和41年から46年（1966～71）まで、仕事で堅田に赴任され、休日を利用して堅田や仰木、琵琶湖の姿を撮影されました。在住当時から写真展を堅田で開催、堅田を離れた後も平成10年（1998）に北部地域文化センターを会場に「堅田再見」として大々的な写真展が行われました。実はこの時に出展された約100点の作品は、会期終了後、歴史博物館に寄贈していただいたのですが、近年、大西さんはグループ展の作品として、大判パネルを毎年数点ずつ制作することになり、展示後に博物館に少しずつ寄贈しましょうというのが、冒頭のお申し出でした。

当初はお言葉に甘えようと考えたのですが、本年秋の堅田・本福寺展にあわせて、博物館で堅田を特集したいという思いから、大西さんに無理をお願いし、約70点の

写真展として構成していただくことになりました。

今回展示する写真は、大西さんがこの展覧会のために印画紙への焼き付けから、木製パネル作成までを1人でこなされた作品です。準備中、何度もご自宅に打ち合わせにお伺いしましたが、1937年生まれのご年齢とは思えないほどパワフルに取り組んでいただきました。また、当時の堅田の様子や人々との交流、撮影時の思いなど、多くのお話をお聞きできたのは、なによりの収穫でした。

写真に残る堅田の風景

昭和40年代の堅田は、大津市との合併（昭和42年）や江若鉄道の廃線（昭和44年）など、町が大きく変わります。そのためか、大西さんの写真をじっくり眺めると、そうした変化があちこちで発見できます。

例えば船。昭和40年代の堅田には、木造船が現役で活躍していました。FRP製の船が登場するのは、昭和50年前後のことですから、大西さんが撮影された年代の漁港にある船はすべて木造船です【写真1】。

内陸部に目を移しても、内湖へつながる水路にも木造船が沢山浮かんでいます【写真2】。この船は田船で、漁業ではなく内陸部の水路を行き来し、農作業などに

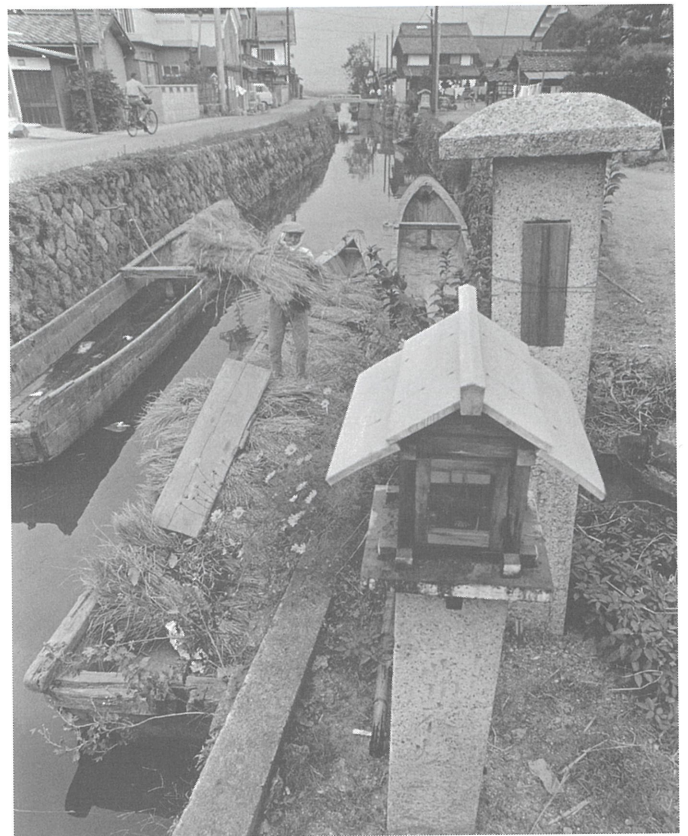
使われていました。今でいえば軽トラ替わりでしょうか。こうした写真を見ると、堅田の人々と琵琶湖や水が、今より近い関係だったことが理解できます。

大西さんの堅田への思い

大西さんが堅田を去られた後、昭和49年(1974)に国鉄(JR)湖西線が開通、その後も湖西道路の整備などにより周辺の宅地開発は急速に進み、50年前の堅田を共有することは年々難しくなりました。そのため展示では、堅田や仰木の方々に写真をご覧いただきながらお聞きした当時の様子や思い出話をパネルにし、展示の合間に織り込みます。

「堅田の江戸時代が写っている」と大西さんはご自身の写真を評されます。今回展示する写真には、堅田が古くから培ってきた生業や町の姿が確かに記録されています。作品をフィルターにして、今の堅田の町の個性や魅力を読み取っていただければと思います。

(副館長 木津勝)



【写真2】今堅田の水路に浮かぶ田船(昭和45年10月)

【ミニ企画展から】俳諧摺物のお値段

大衆向けに発行された浮世絵版画と似てはいるものの、限定枚数で、富裕層の趣味仲間向けに発行された木版画を「摺物」と呼びます。歳時の贈答品や、俳諧・狂歌の句会・歌会の記念品として、高品質な奉書紙で発注されました。

注目はそのお値段です。ミニ企画展「義仲寺の花鳥俳諧摺物 村田東蒼と中島来章」(9月5日~10月15日)でも、上質な「摺物」が出陳されますが、作品に付属する領収書の金額に少々驚かされました。

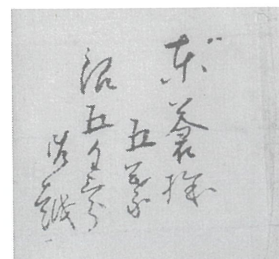
- ・三春遊興(楽浪社)中島来章画:
五枚で銀五匁三分
- ・明景(楽浪社)中林竹洞・小田海遷他:
五枚で銀四匁八分
- ・千山萬叡春如錦(楽浪社)絵師無款:
五枚で銀三匁五分
- ・春のいとま(楽浪社)水墨三昧印:
五枚で銀二匁九分

幕府の公定相場が江戸後期は一匁=約108文とということなので、上記の各摺物5枚分のお値段は、

1枚20文とされる浮世絵版画を数十枚分も入手できる代金だったのです。まさに限定保存版のお値段です。
(学芸員 横谷賢一郎)



三春遊興(楽浪社の句会)中島来章画 個人蔵



銀五匁三分	東蒼様
御越	五葉

摺物の領収書

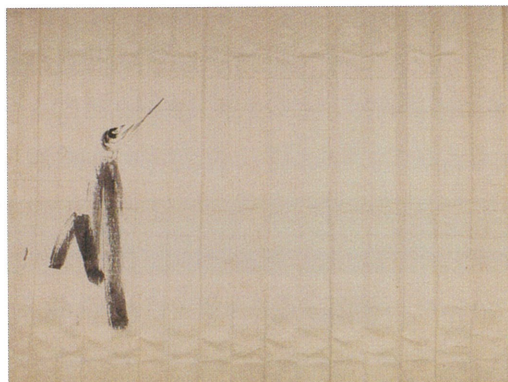
収蔵品紹介

庄田家資料 (当館蔵)

10月17日(火)～11月19日(日)に開催するミニ企画展「旗本庄田家と比良」では、当館所蔵の庄田家資料を中心に、江戸時代の旗本である庄田家と、庄田家が支配した比良地域とのかかわりを紹介します。

庄田家資料は、旗本庄田家の当主に伝わった資料です。庄田家は江戸時代を通じて2,000石～3,000石の知行があり、将軍に直接御目見えできる家でした。庄田家は丹波国氷上郡(現 兵庫県丹波市)出身です。安土桃山時代の当主安次は、丹波攻めをした明智光秀に敵対し敗北。浪人したのちに天正18年(1590)に家康に仕えました。その後、関ヶ原の戦いに参加。慶長19年(1614)、同20年の大坂の陣では旗奉行を務め、家康から鯉節と戦功を賞する手紙をもらっています。鯉節は「勝男武士(かつおぶし)」とも書き、当時から縁起物として有名でした。安次の武勇を家康が褒め称え、鼓舞する意味で鯉節を与えたのでしょう。残念ながら、鯉節自体は現存していませんが、それを包んでいた袋は残っています。

安次の子安村は先に亡くなっていたため、安村の子安照が跡を継ぎました。安照は3代将軍徳川家光に気に入られたようで、若い時から家光に仕えました。「庄田家資料」には、安照が家光からもらったという花鳥画があります。



伝徳川家光画(「庄田家資料」のうち)

その安照はかなりの大食いだったようです。安照が日光東照宮の普請奉行だった時、当時大食いで有名だった一応という日光の僧侶と蕎麦の大食い対決をしました。おそらく現在のわんこそばのようなものでしょう。両者ともに50盃ずつ食べても決着がつかないため、安照が「このままでは決着がつかないので、蕎麦をいれているお櫃(ひつ)に直接汁をかけて勝負しようぜ!」と持ちかけたところ、一応は逃げ出してしまいました。安照はまだお腹が

減っていたのか、宿にもどってから湯漬け(ご飯を湯に漬けたもの)を食べていたといえます。

また、徳川家光が安照の大食いを聞きつけて目の前でその様子をご覧になったところ、柿100個と砂糖10斤(約6kg)を平らげました。しかも、柿は種ごと食べたようです。

大食いは遺伝するといえます。元禄7年(1694)、安照の孫安利はご飯6盃にうなぎの蒲焼80切を食べたと伝えられています。現代でうなぎの蒲焼1切150gですので、80切だと12kgになります。費用がいくらかかったか考えるだけでも頭がくらくなりますが、安利にとって幸いだったのは、よその家で振舞われた際の話なので、自腹は切っていないことでしょう。

以上の話は、「元禄世間咄風聞集」という元禄年間の江戸の噂話を書き留めた書に記されている話です。噂話なので真偽は不明ですが、庄田安照や安利が大食いで有名だったのは事実とみてもよいでしょう。

話が大きくそれましたが、安照に話を戻しますと、寛永9年(1632)、大御所徳川秀忠が亡くなり、名実ともに徳川家光が天下人となると、翌10年に安照は1,000石を加増され、合計3,000石となりました。

この加増された1,000石の内訳は南比良村全村(882石余り)と北比良村の内117石余りです。

その後、先に出てきた大食い安利の時、弟に400石を与え、庄田本家は2,600石、庄田分家は400石となりました。市域に限ると、本家は南比良村575石余りと荒川村25石余り、分家は南比良村282石余りと北比良村117石余りでした。

本家は、この後明治維新になるまでずっと南比良村と荒川村を治め続けます。一方、分家は、享保12年(1727)に知行400石を没収され、代わりに米400石を毎年幕府から現物支給されることになりました。庄田家が治めた北比良・南比良・荒川には今も庄田家に関する資料が多数伝わっています。

ミニ企画展「旗本庄田家と比良」では、「庄田家資料」の他に、北比良や南比良、荒川に残る資料を展示し、庄田家と比良地域について紹介します。ぜひ当館へお越しください。

(学芸員 五十嵐正也)